

浄瑠璃素人講釈 本朝廿四孝 四段目切 十種香の段

杉山其日庵

〈出典：岩波文庫『浄瑠璃素人講釈（上）』岩波書店、平成16年10月〉

この段は、明和三〔一七六六〕年戊正月（大正十五年を距る百六十一年前）、竹本座にて興行し、作者は竹本三郎兵衛にて、役場は竹本鐘太夫であると思う。しかしてこの場は四段目とは云えど、斯芸本領の凄惨悲愴の筋を書かず、太夫と人形遣いの芸格本位に仕組みたるもの故、これを語る太夫は、舞台の高尚と人形の品位とを寸毫も失わぬように通って語り、人形遣いは、人形の容と間と振とを見物の眼底に永く印象するよう遣わねばならぬ事になっておる場である。故にむつかしさとしては限りなき物ながら、場格としては、三段目よりもズーツと下るのである。前としても、「下駄場」と「鉄砲渡し」の違いがあるように、切場も「廿四孝」の外題は、三段目がお仕舞である。いわんや語った人が島太夫、即ち二代目若太夫である。四段目は鐘太夫と云って、日本無双の大音の太夫である。それにこの四段目を語らせて、自分はアノ恐ろしい三段目を語って、この外題の結びを付けた力に至っては、ただただ驚嘆の外はないのである。

またかくの如き名人に三段目を語られた後に、全く筋の違うような、風の違ったこの四段目を、日本一の大音で語って、それがこの人の出世芸となるほど上出来であったとは、この鐘太夫が当時の勉強と鍛錬もまた恐ろしいほどである。なぜなれば、この鐘太夫は「忠臣講釈喜内住家」や「近江源氏」の八ツ目「盛綱首実検」を語った人と、同名同人であると云うことで、この四段目の修業が、如何に精励努力の結果であったかと云う事が判るのである。今時の太夫は、己れが給金を貰っている役場を粗末にして修業をせぬのみならず、自分の我流に節を付けて、勝手に誂付けている。偶々上等の部が、他人の悪い所ばかりを真似るのである。真似の出来る所はきっと悪い所で、良い所は修業せねば決して出来ぬのである。否修業してさえ出来ぬ者が多いものである。

故撰津大掾は曰く、

「鐘太夫さんの風でこの段を語っては、銭は儲かりませぬが、当り前に語れば、実に立派な場でござります。先ず『ふし戸へ行水の』と『ギン』で流しまして、『シャン』と弾いた音より高く『流れと』と四段目風の『ハルフシ』で出る時に、この一段の位がチャンと定まらねばなりませぬ。団平さんはコウ申ました。——私が『シャン』と弾いて、アンタが『流れと』と出るまでの間に、毎日脇の下から冷たい汗がたらたらと出るよ——と云われた時は、この『流れと』で若い時から永年沢山お金を儲けました私もまた冷ッと致しまして、その翌日から『シャン』と弾かれますと、目がグラグラッとするような気が致しました。それから『チントン』と受けられた後は、大抵『トン』の音に付いて、当り前に語りますが、それが違います。『チン』の方の音に付いて自然と音を下げた来て『中ギン』の音に漂って、『人の義作が』と段々と運んで参ります。それから詞の困難はまた別儀でござりますが、八重垣姫の出と来ましては、『ギン』の音の遣

い分けが、『ビードロ』甕がめの中で金魚の泳ぐように、澱やまずにハッキリ、ユラユラと『ギン』の音を遣い分けて語んなはれと、団平さんに云われました時は、私は太夫を止めようかと思いました。また『サハリ』になつては、実に泣なきました。——アンタは師匠はる春さんはる〔五代春太夫〕のも聞いていなさろうが、八重垣姫がソー腹の中で『ウレイ』の譜つぽを探たづねて語つては、カラ駄目じゃ。涙はオボコ涙で、涙までオボコな色気がなくてはイケません——と云われましたから、私は、『イヤ泣いたのは八重垣やえがきひめ姫ではありませぬ、私が泣いたのだす』と申もうしましたら、プツツ笑いやはりました。この段で名高はなしい咄は、私は団平さんと分れました後も凝こりましたが、松葉屋まつばやし広助ひろすけと共に五年目ごねんめに、少し心面白おもしろくなりました。また『庭たまの溜せんすいりの泉水』の処ところや、『船人ふねびとに渡り頼たのまん』などの処ところあたりになりますと、景事けいじの心持こころもちやら、道行みちゆきの足取あしどりやら、その混雑まじりな芸風げいふうは何ともお咄はなしになりません」

と云った。これを聞いた庵主あなぬしは丁度ちょうど、能楽喜多流のうがくきただりゅうの哲人梅津只円翁てつじんうめつしえんが九十二歳九十にふたの時、庵主が父に「葵あおいの上」を伝授でんじゆつせらるる時の講釈こうしゃくと、寸分すんぶん違ちがわぬと思った。なるほど義太夫節ぎだゆうせつは能楽から出て、チャンと芸格げいかくの極きままった物じゃナア—と聞いていた。

今や哲人、大掾すで已すでに死して、その慈訓じくんのみ庵主あなぬしが耳底みみそこに残り、斯芸みとうんの妙蘊めううんは已すでに世よに廢れて、皆新規みなあらたのハイカラ義太夫節ぎだゆうせつばかりとなつて、彼の帝展ていけんの画えの如く、筆力ひつりきと氣胆きたんとを練ねらずして、ただ色彩しきさいの塗漚とたんにのみ流れて来たように、この芸も、その風格ふうかくによりて生動せいどうすべき人形にんがたは、様々さまざまの間違まじりつた声の画えの具ぐで、顔も首も塗り潰つぶぶされている者となつて来たから、やむをえず、庵主あなぬしが昔日せきじつ聞いた先哲せんてつの咄はなしを思い出したまま、斯かくは愚痴ぐちるのである。

(初出=大正九年四月・『黑白』三七号)

注

- (1) 『声曲類纂』による記述。正本によれば、作者は近松半二、竹本三郎兵衛。
- (2) 「『ギン』の音の遣い分けが」の部分、初出にはない。
- (3) 五代竹本春太夫(一八〇八～一八七七)。四代竹本氏太夫に入門。竹本さの太夫、文字太夫を経て、天保十三(一八四二)年五代春太夫を襲名。明治五(一八七二)年から十年まで、文楽座の紋下を勤めた。摂津大掾や三代大隅太夫の師匠。
- (4) 五代豊沢広助(一八三一～一九〇四)。三代豊沢広助に入門、豊沢豊之助を名乗り、後に四代広助門下となる。初代豊沢富助、二代猿糸を経て、明治三(一八七〇)年五代広助を襲名。通称松葉屋。二代団平と並び称される名人で、団平が彦六座へ行った明治十七(一八八四)年以降、文楽座の三味線紋下を勤めた。同二十二(一八八九)年以降、二代越路太夫(後の摂津大掾)の三味線を弾く。
- (5) 五代広助は、明治二十二(一八八九)年八月から越路太夫(後の摂津大掾)の三味線を弾く。五年目は、同二十七(一八九四)年二月の御霊文楽座の興行(「十種香」は越路太夫)を指すか。

- (6) 梅津只円（一八一七～一九一〇）。シテ方喜多流の能楽師。福岡生れ。九州能楽界の重鎮として活躍。杉山の長男泰道（夢野久作）の著書に『梅津只円翁伝』（昭和九年刊）がある。
- (7) 梅津只円が九十二歳の時は明治四十一（一九〇八）年。杉山の父、杉山三郎平は明治三十五（一九〇二）年三月二十日に亡くなっている。享年六十四。
- (8) 初出は「文展」。文部省美術展覧会（略して「文展」）。明治四十（一九〇七）年第一回が開かれたが、次第に選考委員の選定をめぐる弊害が生じ、体質改善を図って大正八（一九一九）年帝国美術展覧会（帝展）となった。